

コロナ禍における中国語の遠隔授業について

——学生へのアンケート調査に基づくフォーカスグループディスカッション——

On Distance Chinese Learning During the COVID-19 pandemic: Focus Group Discussion Based on Questionnaire Survey of Students

安藤 好恵・陳 小明・胡 杰・佐竹 保子・田村 新・

上田 裕・山口 直人・山内 智恵美・吉田 慶子・趙 葵欣

Yoshie ANDOU, Xiaoming CHEN, Jie HU, Yasuko SATAKE, Arata TAMURA,

Hiroshi UEDA, Naoto YAMAGUCHI, Chiemi YAMAUCHI, Keiko YOSHIDA, and Kuixin ZHAO

Key words: 中国語遠隔授業, フォーカスグループディスカッション, コロナ禍

English Abstract : In this study, we conducted a questionnaire survey for students and a focus group discussion by multiple teachers with the aim of examining the advantages and problems of remote classes conducted in 2020. As a result, the following were cited as advantages of distance lessons: “support for autonomous learning for students” “grasp of learning status by teachers” “utilization of Zoom”. “Stress of students,” “difficulty of class management,” and “burden on teachers” were cited as problems in distance lessons. Among these, students’ support for “utilization of Zoom” is low, and attention should be paid. Based on the above, the following classroom policies for the next fiscal year were pointed out: “Utilization of remote teaching materials”, “Confirmation of the degree of consolidation of knowledge and understanding”, and “Declaration of the necessity of ICT skills”. The following issues were pointed out: “Responding to level differences” and “Responding to difficulty in questioning”. In addition, it was confirmed that the correspondence based on the fact that the new second year students experienced only remote lessons was necessary.

1. はじめに

2020年度の大学及び高等専門学校の授業は、新型コロナウイルス感染症の拡大防止と学生の学修機会の確保を両立させるため、学生が通学する形で行われる従来の対面授業と多様なメディアを高度に利用して行う遠隔授業を併用する形で実施された。文部科学省「大学等における後期等の授業の実施方針等に関する調査結果（地域別）」によれば、1都6県を含む関東圏の大学等の後期授業の実施形態について「対面・遠隔併用」と回答した大学等は90.3%、対面授業・遠隔授業を併用する場合の両者の割合については「3割対面」が30.0%、「ほぼ遠隔」が32.7%であった。2021年度においても、新型コロ

ナウイルス感染対策と学生の学修機会の確保のため、対面授業と遠隔授業の併用は継続する見込みである¹⁾。

遠隔授業については、本研究の調査対象校では、全学生を対象としたアンケート調査が実施され、「前期授業に対する満足度」に関する設問に対し、「とても不満である」と回答した学生は、全学年とも1割を大きく下回ったこと、「感染症の影響に関わらずどの授業形態が良いと思うか」との問いに対し、「実験・実習・実技」以外の科目では多くの学生が「同時双方向型や配信型の遠隔授業が良い」と回答しており、とくに受講生が80人以上の授業に関しては、非対面授業を希望する声が8割以上という結果になったことなどが報告されている。

また、各科目においては授業担当者が受講生に授業の感想を提出させる、アンケート調査を実施するなどの方式により、学生の意見や要望の把握に努めてきた。しかし大学全体では調査対象範囲が広すぎることで、また教員は必ずしも毎年同じ科目を担当するとは限らないことから、学科レベルでの状況把握が必要であると考えた。そこで本研究では大学全体と各科目の中間に位置する学科レベルで遠隔授業の利点及び問題点を検討することを目的とし、同一学科に所属する学生へのアンケート調査及び複数教員によるフォーカスグループディスカッション(FGD)を行った。学生の意見、複数教員の視点を共有することにより遠隔授業の実情に対してより包括的で具体的な視座を得ることが期待できる。

2. 研究方法

遠隔授業における実情を明らかにするために、学生へのアンケート調査と教員によるFGDを実施した。

2.1 遠隔授業に関する学生へのアンケート調査

東京都の私立大学中国語学科に在籍する2、3、4年生のうち、異なる授業形態で行われる授業（Zoom等のWeb会議サービスを使用し、リアルタイムで行われる同時双方向型の授業形態と、提示された資料を自ら読んで、課題に取り組む課題提出型の授業形態で開講される授業）をどちらも受講している学生118人（2年生55人、3年生44人、4年生19人）を調査対象とした。

調査は後期の授業がほぼ終了し、学期末試験が行われる間の2020年12月から2021年1月の約1カ月間に実施した。アンケート調査の依頼、回収は朝日ネットによるクラウド型教育支援システムmanabaを通じて行った。依頼文書には教育研究のための調査であり、成績評価には影響しないこと、アンケートの提出は任意であることを明記した。

調査票は選択形式1項目「以下の3種類の授業形態の中で最も自分に合っている（いた）授業はどれですか。1. 対面授業／2. Zoomによる遠隔授業／3. manabaから課題提出する授業」、自由記述2項目「遠隔授業（Zoom、manabaから課題提出どちらも含まれます）でよかった点はなんですか。」「遠隔授業（Zoom、manabaから課題提出どちらも含まれます）で困った点はなんですか。」の計3項目で構成され、特定の授業についてではなく今年の中国語学習全体として回答することを求めた。

提出されたアンケート数は90（2年生45人、3年生34人、4年生11人）であった。アンケートは個人情報削除し、明らかな誤字を修正（「事業」→「授業」な

ど）した後、学年別に並べ替えて通し番号を付し、教員によるFGDの資料とした²⁾。

2.2 教員によるFGD

調査校中国語学科に勤務する専任教員8人によるフォーカスグループを構成し、1年間の遠隔授業について認識を共有するためのFGD I、その後学生のアンケート調査結果に基づき、気づいた点や次年度の授業運営について検討するためのFGD IIを実施した。参加者の属性を表1に示す。授業形態としてZoomを使った授業と課題配信のみの授業両方を行った教員は5人、すべての授業をZoomで行った教員は1人、課題配信のみで行った教員は1人、課題配信の授業と対面授業（後期1年生の科目）を行った教員は1人であった³⁾。

FGD I、IIは各2回、計4回実施し、FGD Iには計9人、FGD IIには計7人が参加した。1回のFGDの平均時間は約1時間であった。FGDの内容は録画し、文字起こししたデータを全員が確認した後、著者1名が佐藤(2008)に基づき発言の文脈にそって切り出した文書の断片（文書セグメント）に見出し語を付ける作業（コーディング）を行った。文中ではカテゴリーを【 】、コードを《 》、語られた内容を「 」、学生の自由記述を〈 〉で示す。

表1 FGD参加教員の属性

No.	性別	母語	2020年度に行った授業形態	参加したFGD
1	女	中国語	Zoom、課題配信	I、II
2	女	中国語	Zoom、課題配信	I、II
3	女	日本語	Zoom、課題配信	I、II
4	男	日本語	Zoom、課題配信	I、II
5	女	日本語	課題配信	I、II
6	男	日本語	対面、課題配信	I、II
7	男	日本語	Zoom	I、II
8	男	中国語	Zoom	I
9	女	日本語、中国語	Zoom、課題配信	I

3. 結果

3.1 FGD Iの分析結果

FGD Iでは2020年度の遠隔授業のふり返りをテーマに、各教員の授業実施方法、遠隔授業でよかったこと、大変だったこと、学生について気づいたことなどについてディスカッションが行われた。録画データの分析結果

から、《出席、集中力、課題提出の向上》《個別指導》《Zoomの活用》《質問しやすい》《対面より詳しい説明》《自分のペースで学習》《学生間の格差》《通信環境や設備の問題》《相互学習の効果が減少》《クラスの雰囲気作りが難しい》《授業に対する認識の齟齬》《教員の負担》という11つのコードが生成され、これらは【遠隔授業の利点】【遠隔授業の問題点】という2つのカテゴリーにまとめられた。

3.1.1 遠隔授業の利点

【遠隔授業の利点】として、《出席、集中力、課題提出の向上》《個別指導》《Zoomの活用》《質問しやすい》《対面より詳しい説明》《自分のペースで学習》が挙げられた。

《出席、集中力、課題提出の向上》については、「(昨年度と同じクラスを担当したが) 昨年は学習意欲に欠けて宿題もほとんど提出されない状況だったが、今年度オンライン授業になった結果、出席率と宿題の提出率が大幅に改善した。また昨年度は教室が狭くてすぐ隣にクラスメートが座っていたこともあって私語がちよっと多くて集中力に欠けていた。今年度はオンライン授業になったためそういったことができなくなり、集中力が高まったという風に感じた」「学生九十分钟的课几乎没有一秒钟停止,所以信息量,学生获得的知识,我觉得比那个面对面上课获得更多(学生は90分の授業を一瞬の休みもなく受け続けるため、情報量や、学生の得た知識は対面授業よりも多かったと思う)」などが挙げられた。

《個別指導》については、「一人一人について本文の全文を音読したデータを提出させているし、練習問題ドリル全て音読させているので学生一人一人の音読を聞くという点では圧倒的にこの方が細かく聞ける。授業90分で一人一回当たればいい方だと思うが、それと違って完全に一人のものを音声で聞けるので、どれくらい上達したかというのは全然顔は合わせないが結構正確に把握できただろうと思う」「個別指導のおかげで各人の細かい弱点が非常によく見えてきて、それを例えばSV0がSOVになっているみたいな、前置詞がどうかそれを修正できたことが良かったと思う」「対面式の場合は毎回宿題を出すのではないので、学生がどういう漢字を書いているのか確認できなかったが、今年は必ず自分で書いて写真を撮って私に送るという指示を出した。それを見ると既習クラスでも結構漢字の書き間違いが多く、ふだん対面授業で気づかないことに気づくようになった」など学生一人一人の学習状況の把握がしやすかったという意見が挙げられた。

Zoomを使用して授業を行った教員からは、「直接会うことができない状況の中、Zoomによってほぼ通常通りの授業ができたことがよかった。特にコミュニケーションが欠かせない語学の授業に対してZoomが使えてとてもありがたいと思った」「例年だとグループワークで来ない学生がいて、代わりに誰かがやっちゃったりということがあり、あの子は何もしないのに同じ点数ももらってるというクレームが出てくるが、今回は学生同士が直接連絡を取れないので、出席しない学生には私の方で直接本人に携帯で連絡してそういう学生のみを集めてグループを作ったことにより、(クレームが)出なかった。私が代わりに入ったことでかえって今までより良かったかもしれない。だから今のこのやり方というのがZoomとクラス授業でそれほど差がないという風を感じている」「普段の授業では全く質問をしてくない子がZoomの授業の中でチャットの中から質問をしてくることがたくさんあって、あまり積極的じゃない学生もすごく先生に対してアプローチをしやすかったのかなっていう風には私は思った」など《Zoomの活用》《質問しやすい》ことなどが挙げられた。

また遠隔授業の教材配信について、「対面では1回説明して終わりだが、遠隔では文法事項全て教材で文字にしているので、見直して読み直してくれば必ずわかるというそこが良かったと思う」「動画配信の場合は学習者は自分のペースで勉強できたことがよかった」

「Zoomをレコーディングしてアップすることで、出席できなかった子も見ることができるし、ちょっと分かりにくい文法なんかがあった場合には繰り返し見てもらって勉強してもらっていいのが良かったと思う」など、《対面より詳しい説明》が配信され、学生が《自分のペースで学習》できることなどが挙げられた。

3.1.2 遠隔授業の問題点

【遠隔授業の問題点】としては、《学生間の格差》《通信環境や設備の問題》《相互学習の効果が減少》《クラスの雰囲気作りが難しい》《授業に対する認識の齟齬》《教員の負担》が挙げられた。

《学生間の格差》については、「課題にコメントしても反応してくる学生とそうでない学生がいて、反応がない学生は次も同じような間違いをするのでどんどん差が開いていってしまった」「一つのクラスにレベルの異なる学生が存在している場合、対面のように目が届かないのでこれない、声を上げない学生のケアが充分にできなかった」などが挙げられた。

また《通信環境や設備の問題》について、「カメラやマイクがないパソコンで授業に参加している学生への対応が難しい」、授業に参加していてもカメラやマイクをオンにしない（できない）学生が多いことにより、「クラスメートの発言や発想から学ぶ機会が減ってしまった」「文章を読んだ後でみんなで議論しましょう、中国語で話しましょうと言ってブレイクアウトセッションにしても、みんなカメラオフ、ミュートにして黙り込んでしまう」など《相互学習の効果が減少》し、授業中も「表情が見えないので（あてる順番や難易度の調整などの）手加減ができない」「反応が返ってこないで困る」などの《クラスの雰囲気作りが難しい》という問題も生じた。

また《授業に対する認識の齟齬》として、「（学長は）全てフォローしてあげなさいフォローしてくれるという風に言っている」みたいに受け取っている学生もいて、旅行や車の免許を取りに行くから Zoom には参加できない、課題配信にしてくださいとか、それは学長のメッセージを取り違えていると思っても、その子にだけ教材を配信しないということはできないので、その辺の学生の認識の違いとかちょっと度を越えた要求とかにどういうふうに対応していけばいいのかわからないのがよく分からずそれは今後の課題なのかなという風に思った」という大学全体の指針、科目担当者の授業方針、学生の解釈のずれを指摘する意見や、講義授業を課題配信のみで行った教員から「多くの学生からわからない、難しすぎるから Zoom でやってくれと言われたが、（対面授業の時も、授業中言葉で説明してもやっぱり分かってなくてあまり課題にもうまく答えられないという学生が多かったので）おそらく Zoom でやった方がもっと効率は悪かったと思う。今回は青字で喋るところを全部書いて配信したので、ちゃんと読んでくれれば今回の方がよくわかったんじゃないかとは思う。全体的な不合格者の率とか、だいたい毎年とあまり変わらないぐらいの感じで、この形をやったから特に悪いということもなかった」という、授業内容の理解の難易度を授業形態によるものと取り違えているのではないかという意見が挙げられた。

また全体を通して「課題を一人一人採点しなければいけないし、質問にも一人一人答えなければならない」ことや、詳細な説明を書いたプリント、パワーポイント、動画の準備のため「時間がかかって本当に大変だった」「参照可の試験とせざるを得ないため、試験問題をどのように作るか悩んだ」「Zoom 授業で顔を出してほしいと言っても学生は嫌だと言う、あまり言うとハラスメント

になるだろうし、そういうところでも気を遣った」など対面授業に比べ時間的、精神的な《教員の負担》が大きくなったことが挙げられた。

3.2 遠隔授業に関する学生へのアンケート調査結果⁴⁾

FGD I 終了後、参加者には「遠隔授業に関する学生へのアンケート調査結果（最も自分に合っている授業形態の集計結果＝表 2 及び自由記述）」が送られ、全員がこれを読んだうえで FGD II に参加した。

表 2 自分に合っている（いた）授業形態集計結果

		授業形態			合計
		対面	課題のみ	Zoom	
学年	2	24	11	10	45
	3	14	13	7	34
	4	5	3	3	11
合計		43	27	20	90

3.3 FGD II の分析結果

FGD II では、授業形態の集計結果、自由記述内容、次年度の展望などについてディスカッションが行われた。録画データの分析結果から、授業形態の集計結果については《課題提出型が好まれる理由》《Zoom の支持が低い》《学年差》《科目の性質》という 4 つのコードが生成され、これらは【対面>課題のみ>Zoom】というカテゴリーにまとめられた。

自由記述内容については、遠隔授業で困ったことに関するコメントから、《質問がしにくい》《発言がしにくい》《遠隔授業での公平性》《教員間の授業方針の不一致》という 4 つのコードが生成され、これらは【遠隔授業における学生のストレス】にまとめられた。また遠隔授業でよかったことに関するコメントから、《計画的学び》《自ら学ぶ姿勢》という 2 つのコードが生成され【遠隔授業における自律学習】にまとめられた。

次年度の展望については《遠隔授業教材の活用》《定着度の確認》《格差への対応》《質問しにくさへの対応》《遠隔しか経験していない新 2 年生》という 5 つのコードが生成され、これらは【次年度の授業方針】【次年度の課題】【新 2 年生への対応】という 3 つのカテゴリーにまとめられた。

3.3.1 授業形態の集計結果について

授業形態の集計結果【対面>課題のみ>Zoom】については、「対面式の選択が一番多いことに安心した」という一方で、「思っていたよりも対面がいいという人が少

ないなと思った」「対面が43で課題とZoomを足すと47で遠隔の方が多くなる」などの意見が挙げられた。また《学年差》を見ると「2年生は対面(24)と遠隔(11+10)がほぼ半分だが、3年生は遠隔(20)が対面(13+7)を超えている」という結果について、「《科目の性質》とも関係がある、2年生は基礎語学の授業が多いので対面が多く、3年生以上は講義形式の授業が多いので、それなら対面はそんなに必要じゃないと考えていると思う」という授業形態との関連性についてや、「やっぱり大学生活すれてくるとなかなか授業に行かないで済ませられるほうがいいんだろうなあというのが現れていて面白いなと思って見ていた、いかにして学校に学生を連れてくるかというのがなかなか頭が痛い」という大学生活への慣れなどが指摘された。

「課題のみ」と「Zoom」では《Zoomの支持が低い》ことについては、「(自分がZoomをしたいので)ゼミで学生に聞いてみたところ「いや絶対課題提出型がいい」と言われて反対されて、仕方ないと思った」のようあらかじめ予想できていた教員もいたが、ほとんどの教員は「なるべく対面授業と同じように授業をやりたかったので、Zoomでの授業の場合はリアルタイムで先生の説明を聞ける、そして先生との交流もできるという点から一番対面授業に似たような授業ではないかと思い込んでいたが実際はそうではなかった」などのように、Zoomを支持する学生が一番少ないことに驚いていた。その理由としては、「学生からの意見を見ていると、Zoomのネット環境の悪さとか、先生のZoomの使い方の悪さというものに批判が集中しているので相当ひどかったんだろうと思う。音が聞こえなくなるとか中断されるとか。そこは差し引いて考えないと、ZoomがZoom本来の能力をきちんと発揮したのであれば、絶対にZoomの方が課題提出よりも多かったらと思う」のように通信設備などのハード面の問題を指摘する意見、「対面のよさと課題提出という遠隔のよさっていうのは両極端にあって、Zoomって真ん中にあるんだと思う。時間は拘束されるけど対面ほどの共有感はないっていう、ちょうど真ん中の所に位置しているのでZoomというのがだんだんあまり受け入れられなくなっていったのはその理由かなという風に私は捉えた」のようにZoomは中途半端であるとする意見、「親と同居していたら、親の前で発音するのは恥ずかしいとかそういうのもあると思う。もし自分がズームで発音したら他の学生の親に聞かれたらどうしようという悩みもあると思う」「大学に行ってそこで参加するんじゃなくて、自分の生活環境そのものが出てしま

うと、プライバシーの侵害にならないのかなっていう感じがする」のようにZoom授業によって生活環境やプライバシーが露呈することへの不安に問題があるとする意見などが挙げられた。

《課題提出型が好まれる理由》については、「ネット授業に関して利点が<特に思い浮かばない>のに「課題のみ」を選択している学生や、<授業がとてもしっかりにくい>にもかかわらずZoomを選択している学生がいる、どちらも3年生なので彼らは多分大学に行く手間が省けたというだけの理由でネット授業をしたいと考えているのでこのような状況は心配だ」という安易な選択を懸念する意見や、「ゼミ生たちに聞いてみたら、やっぱりいつでもどこでも見れる方がいい、というのが圧倒的にあって、あと時間に縛られたくないということも言っていた」「課題提出でも先生に積極的に質問すれば、普段の時よりももっと丁寧に答えてくれて、何度も何度も質問のやり取りが出来る」など一年間の授業を通して遠隔の良さを学生が理解してきたのではないかという意見が挙げられた。

3.3.2 自由記述内容について

【遠隔授業における学生のストレス】については、まず《質問がしにくい》について、「ちょっとびっくりした」という意見と「想定内だった」という意見に分かれた。「びっくりした」理由としては、教員側に「個別指導にもすごく時間がかかって大変」「Zoomのチャット機能で活発に質問してくる学生が増えた」という実感があつたためであり、<一方的な授業のため理解度が低くこの一年あまり充実した学習生活は送れなかった><困ったときに先生に聞けず、そのまま諦めてしまうことが多い>などの学生の記述について、「Zoomなら直接とかチャットでいくらでも質問できるし、課題提出型ではmanabaの個別指導が非常に役に立つので、そのために教員はほぼ受講生一人一人の家庭教師と化してしまつてめちゃくちゃ忙しく大変になるけれども、家庭教師型になって行くという利点があるので、それがうまく活用されないのは何故なのかが分からない」という疑問が挙げられた。なぜ《質問がしにくい》のかについては、「どこがわからないのかということや文章で説明することが苦手なのではないか」という意見や「対面の授業でも、授業の最後に「質問ありますか」って聞いても絶対ない、「これで授業は終わります」と言うのと、その時みんな来て、一人ずつ並んで質問するという形が多かった。日本人の特性なのかなって思って。ズームだと絶対みんなの前で聞かなきゃいけないので、やっぱり聞きづらいんで

はないかなと思う」という意見が挙げられた。

また《発言がしにくい》については、〈対面授業より自分の発言が減った(発言がどうしても名簿順になってしまったり)待ち時間が多かった〉〈中国語の会話系の授業で自分よりうまく話せる学生が沢山いて、最初は全くZoomで会話に参加できなかったし、先生に指名されても変に緊張して(失敗を恐れて)発言できなかった〉などのコメントについて、FGD Iでも挙げられた「学生が発言する機会が減ったことにより、お互いに学ぶチャンスが少なくなってしまった」「クラスの雰囲気調整しにくい」ことにより〈相互学習の効果が減少〉したことを学生も感じていることが示された。

授業内容以外のストレスについては、Zoom授業に出席している学生から〈終わってすぐにZoomの講義内容の写真を掲示板に貼ってしまうのでZoomに参加していない人でも感想が書けてしまい、しっかり出てる人と出ていない人との区別ができていないこともどうかと感じた〉という《遠隔授業での公平性》に関するコメントについて、「自分は最初に参加して差をつけているということを学生に言って安心させた。Zoomに出来ない学生に対してきちんと対処するようにということを学長も言っていたので、どういう風に不公平感をなくすかというのをきちんと考えなければいけない」という対応が語られた。一方で〈Zoom授業に参加できなかった時、とある先生は講義を録画して残してくれています、他の授業の先生は残さないの、そのギャップに慣れるのに時間がかかった〉というコメントについて「この辺も学生の問題というよりは教員側の問題、もうちょっと言うと大学がしっかり教員に対してこういう風にやってほしいということを言わないと、不公平感につながっていく」という《教員間の授業方針の不一致》が《遠隔授業での公平性》を保てなくなることにつながる懸念が示された。

【遠隔授業における自律学習】については、〈自分で進んで計画をたて、勉強する場面が多くなることによって、いつも以上に文字等を大事に理解しようとする姿勢の大切さを実感しました〉〈自分で時間を有効活用しようと考えながら学習できたこと〉など《計画的学び》や《自ら学ぶ姿勢》を感じられる記述について、「よく書いてくれたなど感動して共鳴した。こういう自分で計画したりとか、やることを明確化するというのが仕事をする上でも大事なことで、それがオンライン授業で身についたというのが怪我の功名というかとても良かったなと思った」という意見が挙げられた。また〈これから主流

になってくるであろうオンライン学習やパソコンを使うことに以前よりかなり慣れた〉〈パソコンが得意ではなかったが、前よりパソコンをうまく活用できるようになった〉というコメントもあり、教員からは「嬉しく思う」と同時に「学生たちにはネット環境の問題やmanaba、パソコン操作に関するストレスが、思ったより大きかったようだ。もっとサポートすべきだったと思った」という反省点も語られた。

3.3.3 次年度の展望について

次年度の展望については、全体的な【次年度の授業方針】として、「評判がいいという実感を心得ており、幸い今回教材をかなり細かく作っているの、対面になった後でもこうした教材を事前に学生に見せるということは今後やっていきたい」という《遠隔授業教材の活用》や「発表するときなるべくパソコンを使うように、パワーポイントを使えるようにということを伝えていきたい」という《ICTスキルの必要性の情宣》、遠隔授業によって明らかになった《質問しにくさへの対応》については、対面授業の再開に伴い質問のしにくさは改善されていくとも考えられるが、「オフィスアワーを積極的に活用しサポートする」という対応策も提案された。

【次年度の課題】としては、試験を参照可とせざるを得なかったため、遠隔授業でどの程度知識が定着しているか《定着度の確認》の必要性、ネット環境や設備の問題、個別指導への反応の度合いなどの理由で開いてしまった《格差への対応》が挙げられた。

最後に《遠隔しか経験していない》【新2年生への対応】について、2020年度1年生を担当した教員からは、「対面でやった時よりも本当に格差がある、対面の時はできない子たちを引っ張れたが、遠隔では下(の学生)を伸ばせなかった」という意見が述べられた。2020年度1年生については、1クラスのみ後期に対面授業が行われたが、担当教員からは「対面の方が学生は満足していたと思う。前期ずっとやってきたプリント教材とかは同時に配信しているので、文法の説明はプリントでやっているということであまりそこには時間を割かず、対面なので実際に当てて発音させるということができた」「(対面授業には参加せず、遠隔=課題配信型で受講した学生が4人いたが) たぶん彼らはオンラインでもやれるという自信があったので 対面に来なかったんだろうと思う、4人のうち2人は2年次クラス分け試験の結果、(レベルが上の)SとかAに入ることになっているが、2名は私の感じではAクラスに入るだろうと思っていたが、Bクラスだった」という状況が語られた。

これに対し2021年度2年生を担当する教員からは「やっぱり発音がどこまできちんとできているかというのが、私は教えてないので不安に感じている。逆に実際に教えていらしてZoomとかで授業されていたりとか、課題で音声を聞いてみて意外に大丈夫だったということので安心できているというところもあるのかもしれないけれど、やっぱり自分はやっていないのでちょっとそこが半信半疑と言うか、どこまでできるようになったのかなってというのがいまいち分かってないので、そこが新2年生については一番不安な所かなと思う」「1年生の時にオンラインで勉強したこと、その知識がどれくらい定着しているのかということについて不安に思っている。最初の授業で色々試してみないとわからないこともあると思う」「やっぱり今年と同じようにできないだろうな、できれば今年と同じようにした方が、いい子は力つくなという不安はある」などの、発音や知識の定着度、遠隔授業とのギャップに関する不安が語られた。また「総合中国語ってもちろん言語ができることが大事かもしれないけれど、中国を好きになってもらうとか、中国に興味を持ってもらうということも大事だと思うので、中国の多様性とか中国そのものを理解してもらうようなことまで授業でやってあげたい」という抱負も語られた。

4. 考察

本研究では2020年度の遠隔授業についてふり返り、利点と問題点をまとめ次年度の授業方針について検討した。教員の認識と学生の意見（自由記述）との間に不一致が見られたのは質問とZoomについてであった。

4.1 質問、Zoomに関する教員と学生間の認識の不一致

遠隔授業に際しては、学生との双方向性を確保するため教員の連絡先はポータルサイトやmanabaに掲載されていた。課題の採点、フィードバックに加え、メールで問い合わせる学生も多く、ディスカッションでは「寝る前でも学生から質問のメールが来ていると、対応してあげなくちゃと思い、労働環境がめちゃくちゃ悪くなっていった」という声も挙がり、対面授業に比べ学生とのやり取りが各段に増え、対応に追われていると感じている教員がほとんどであった。一方学生はくどうしてもメールなどでは時間が空いてしまう。メールなどでは説明がしづらい<>質問に対する返事が遅いため不安な時間が多い。教室ならその場で質問できる>のように、すぐに回答を得ることができないことにストレスを感じていた。

Zoom授業においても、教員は授業の感想を求めたり、アンケートやレポートを提出してもらうなどの方法で適宜学生の意見を収集しており、それらは概ね好評であったことからZoomを利用したリアルタイムの授業形態の支持は高いと考えていた。学生の意見にも<Zoomだと質問がその場でできるほか、マイクが使えない人もミュートやチャット機能があり、教授のみに送ることができるので家族がいる中受けていたとしても家庭音や騒音が入る可能性も気にせず受けられる><講師が中国語の進出単語をクイズ形式にしていたり、テンポよく指名されることから、普段の授業（対面）と変わらずに集中力を途切れさせることなく受講できた>と考える>などのように好意的な意見もあれば、<対面じゃないとできないような物をZoomなどを利用するのは受けてる側として分かりにくかった><ネット環境に問題があることがあり、集中して授業に取り組むことができない><先生のマイクの音質が悪い時には、上手く聞き取れないこともあった>などのように否定的な意見もあり、評価が分かれた。そしてZoomに好意的な意見を記述していても、自分に合っている（いた）授業形態として対面授業を選択した学生もいることから、「課題配信のみ」と「Zoom」では「Zoom」の支持が低くなったと考えられる。

遠隔授業では学生一人一人とのやり取りがメインとなる傾向があり、クラス全体の雰囲気や学生の総意などは把握しにくい。今回の調査で学生の率直な意見をきき、問題の存在を共有したことで、今後の対応策の検討につなげていくことができた>と考える。この問題については教員個人の工夫や努力だけでなく、通信環境の問題を改善するために大学とも連携し、学生の協力や理解を得ながら改善していく必要がある。

4.2 遠隔授業の利点、問題点、次年度の授業方針

【遠隔授業における利点】として、教員の認識及び学生のアンケート記述から《出席、集中力、課題提出の向上》《計画的学び》《自ら学ぶ姿勢》が挙げられた。また《対面より詳しい説明》の配信や課題の《個別指導》が【遠隔授業における自律学習】支援にも結びついており、【次年度の授業方針】への活用につなげていくことが確認された。

【遠隔授業における問題点】としては、《通信環境や設備の問題》《質問がしにくい》、授業での出席の扱いや《教員間の授業方針の不一致》などによる【遠隔授業における学生のストレス】が挙げられた。遠隔授業においては課題や出席状況が成績評価に占める割合が高くなる

ため、わからない、確認できないことが教員の想像以上に学生の不安や焦りにつながっていることをふまえて対応していく必要がある。

また、対面授業の代替として有効活用されてきた Zoom についても通信環境や通信設備の整備に加え、リアルタイムの双方向型授業を行うためには学生が積極的に授業に参加し発言する必要があることが確認された。学生のネットワーク環境、パソコン設備、プライバシーの問題などは津田ほか 2021、奥ほか 2021 においても指摘されており、これらに対応するためのオンライン授業における協働学習を行うための工夫をこらした実践例が報告されている。今後遠隔授業が継続される場合は、このような知見を取り入れた双方向型授業を検討する必要がある。

上記をふまえた【次年度の授業方針】として、2021 年度の対面授業では 1 年生を除く全学年が遠隔授業を経験していること、そのうち遠隔授業を支持する学生が一定数存在するという事実を念頭に、遠隔授業の利点を取り入れた対面授業の方針を検討する必要がある。遠隔授業では測定が難しかった知識や理解度の定着についても把握し、遠隔授業で開いてしまった格差を解消するための個別支援も必要である。

【新 2 年生への対応】については、遠隔授業しか経験していないことを配慮し、学習状況の把握に努めるとともに大学での授業のあり方、対面授業の良さを伝えていくための対応を検討する必要がある。

5. まとめ

本研究のまとめとして遠隔授業における利点、遠隔授業における問題点、次年度への展望を表 3~5 に示す。

表 3 遠隔授業における利点

遠隔授業における利点	
自律学習支援	出席、集中力、課題提出の向上
	計画的学び、自ら学ぶ姿勢
	対面より詳しい説明
	個別指導
学習状況の把握	出席、集中力、課題提出の向上
	個別指導
Zoom の活用	対面に近い授業（※問題点にもなり得る）

表 4 遠隔授業における問題点

遠隔授業における問題点

学生のストレス	通信環境や設備の問題
	質問がしにくい
	発言がしにくい
	教員間の授業方針の不一致
	遠隔授業での公平性
授業運営の難しさ	相互学習の効果が減少
	学生間の格差
	クラスの雰囲気作りが難しい
	授業に対する認識の齟齬
	通信環境や設備の問題
教員の負担	遠隔授業での公平性
	相互学習の効果が減少
	教材、個別指導、学生への配慮

表 5 次年度への展望

次年度への展望	
次年度の授業方針	遠隔授業教材の活用
	知識、理解の定着度の確認
	ICT スキルの必要性の情宣
次年度の課題	格差への対応
	質問しにくさへの対応
新 2 年生への対応	遠隔授業しか経験していないことをふまえて対応が必要

今後は検出された課題について次年度以降の授業に反映し、対応策を講じていきたい。また 2020 年度 1 年生については、大学における対面授業を経験していないため、2 年生以上と同内容のアンケート調査を行うことはしなかった。彼らについては初年度に遠隔授業を経験した学生として、引き続き調査を継続し対応策を検討していきたい。

注

- 1) 2021 年度 3 月時点での見込みである。
- 2) 調査票では学生にわかりやすい表現として「オンライン」「授業形式」を使用した。執筆にあたり「オンライン＝遠隔」「授業形式＝授業形態」に統一した。
- 3) 十分な通信環境を持たない学生のために、Zoom で授業を行う場合も授業内容とほぼ同等の内容が授業後に配信された。また通学に不安を感じる学生のために、対面授業の場合も、自宅での遠隔授業の受講が認められていた。
- 4) 自由記述に挙げられた主な内容とその学生が選択した

授業形態の集計結果を以下に示す。複数の理由を書いた学生もいるため、集計人数の90を上回っている。なお「課題の量が多い」ことについては全学調査において学生の不満が最も高いことが判明したため、学長から教員に向けて適切な課題付与を求める文書が送られていた。

pdf (最終閲覧日 2021年4月6日)
 佐藤郁哉 2008. 『質的データ分析法』: 新曜社
 津田ひろみ, 大須賀直子, 小松千明 2021. オンラインによる協働学習の効果と問題点, 言語教育エキスポ 2021 予稿集, <https://ja.padlet.com/shiensakai/lw3nq4jjqour19h5> (最終閲覧日 2021年4月6日)

遠隔授業でよかったこと

授業形態 内容	対面	課題のみ	Zoom	合計
時間の有効活用	27	16	13	56
計画的に学べる	3	5	1	9
授業内容を見返せる	3	3	1	7
パソコン操作の慣れ	3	1	1	5
Zoomの授業に満足	1	0	3	4
出席しやすい	2	0	1	3
その他	5	3	2	10
無回答	2	2	0	4

遠隔授業で困ったこと

授業形態 内容	対面	課題のみ	Zoom	合計
通信設備環境が悪い (教員・学生)	13	11	5	29
質問しにくい	7	10	2	19
授業がわかりにくい	5	4	1	10
課題の量が多い	7	0	2	9
他の学生と交流できない	1	3	0	4
Zoomの授業に不満	2	0	2	4
教員の授業方針の不一致	2	0	1	3
パソコン操作が大変	0	0	2	2
その他	11	3	5	19
無回答	1	3	4	8

参考文献

奥聡一郎, 河内健志, 鬼頭和也, 下山幸成 2021. オンラインを活用したこれからの英語授業: オンデマンド、リアルタイム、ハイフレックス、そして…, 言語教育エキスポ 2021 予稿集, <https://ja.padlet.com/shiensakai/lw3nq4jjqour19h5> (最終閲覧日 2021年4月6日)
 文部科学省 2020. 大学等における後期等の授業の実施方針等に関する調査結果 (地域別), https://www.mext.go.jp/content/20201002-mxt_kouhou01-000004520_3.